

## 徒然草私記（七）

緒方惟章

### 二 〈無常の眼〉・〈文学の眼〉

「流布本・徒然草」第一三七段（上・下二巻より構成される徒然草下巻の冒頭に位置し未だ増・追補がなされておらぬ、徒然草の原形態に近いものと推定される、桃園文庫蔵「監表紙本・徒然草」では、第一〇五段に相当する）は、次なる一文、

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。(1)  
から説き起こされる。

今、一文と言った。しかしながら、以後の説明の徹底を期す意味からも、この「一文」が、ほぼ同様の内容を語る、次に示す二文の複合により一文化したものであることを、ここに語っておく必要がある。その二文とは、

花はさかりなるをのみ（哀れなりと）見る（べき）ものか

は。

であり、また、

月はくまなきをのみ（哀れなりと）見る（べき）ものかは。  
である。

「花すなわち桜の花は、満開の状態だけを趣深いと見るべきであろうか、（いやそうではない）」、そして、「月は、一点の曇りも無く冴え渡る、中秋Ⅱ陰曆八月十五夜の名月の趣のみをしみじみと心深いものと見るべきであろうか、（そうではない）」

——〈無常の眼〉とも称すべき、かようなまなざしは、「徒然なるままに」（自分にとつての必然は〈死〉あるのみであり、安定的な〈生〉の時などありえぬのだ、という息詰まるような苦い心を片時も忘れること無く心の中心に据えて）日々生きた、兼好の内部で次第に明瞭化していったまなざしであった。

この世に生を享けるやしばしもとどまること無く死に向かつて推移して止むこと無き、《無常》の相を體と心に灼き付けた兼好が、桜花の生命の美が満開の状態にのみ存する、というが如き考えを抱くいわれは無いのである。桜花に生命の美が存するというならば、それは、桜花の辿る生の種々相のその全ての中に存するものとせねばなるまい。

ここに、私の心を掠めるのは、兼好同様に、《無常の眼》を體と有するところとなった、世阿弥の《複式夢幻能》の形式による《小町物》の中の、前ジテとしての老いさらばえた小野小町の姿の上に、後ジテの艶やかな小町の若き盛りの姿が夢の如く重なる、その場面である。

《無常の眼》は、この後、第二段落を隔てて、第三段落、

咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所

おほけれ。(3)

へと受け継がれてゆく。もつとも、そこに「見所おほけれ」とあるところよりすれば、論は既に《文学の眼》という観点に移行している、とも言うべきであろうか。

《文学の眼》とは果たしていかなるものであろうか？ それを語るのは、溯って第二段落

雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛知らぬも、

なほ哀れた情ふかし。(2)

である。

これにつき語らんとして、その瞬間、私は甚だしい困惑を覚えるところとなる。この一文(厳密に言えば、ほぼ同一の内容を語る二文の複合して一文化したもの)に則して語ろうと思うのであるが、管見の故か、これについてなされた従前の諸家の解釈にして兼好の心の真の姿に触れえたその僅かな一例にも巡り合うことをえぬというのは、いかにも奇異なことである。

小林の指摘する如く、「鈍き刀」を以て「利き過ぎる腕」を御さんとする名工にも似て、「物が見え過ぎる眼」を御さんと努める、兼好の心配りの跡を「徒然草」の文体は随所に窺わせるものであると言え、この問題の箇所にあつては、兼好はむしろ率直に過ぎるほど率直に己が心の底を語っているのであるから……。

が、省みれば、諸家従前の解釈に対する如上の物言いは、具体的説明を伴うものでなかったが故に、その内容において空疎なものであるのみならず、その態度において甚だしく不遜なものである、との印象をさえ与えかねないものであったようだ。そのことを惧れるが故に、私は、ここに、前引例文(本第二段落)に対する私見の開陳をなすに先立って、諸家従前の解釈において問題とすべき数点につき具体的にそれを論じる、という作業に着手することとする。

\* \* \*

さて、その第一のものは、文中「たれこめて春の行衛知らぬも」の部分である。これに対する諸家の解釈の実態を示せば、次の如くである。諸書の排列は、その解釈内容の近似関係を以て一括するという方針に基づき、ほぼ同内容の解釈と思われる諸書については、その刊行の年次に従いこれを掲げることとする。

A

- (1) 家の中に閉じこもって春がどのように去ってゆくのかを知らないでいるのも、  
(浅尾芳之助・森通・野村嗣男著・『文法評釈徒然草』・日栄社刊)
- (2) 家に引き籠つたままで春の暮れて行くの知らないでいるのも、  
(今泉忠義著・角川文庫・『徒然草』)
- (3) 家に閉じこもって春の移り変わってゆくのを知らないのも、  
(金子武雄著・『明解徒然草』・新塔社刊)
- (4) 部屋に閉じ籠って春の季節の移り過ぎてゆくのを知らないでいるのも、  
(保坂弘司著・学燈文庫・『徒然草』)
- (5) み簾<sup>す</sup>を垂れ閉じこもって、春がいつ来ていつ去って行くのやら、その進行の様子を知らない(でいる)のも、  
(松尾聰著・『徒然草全釈』・清水書院刊)
- (6) 簾を垂れて、その中に身をこもらせて、春の次第にふけ

てゆくのを知らずに過ごすのも、

(安良岡康作者・『徒然草注釈』・角川書店刊)

- (7) (家に) 引きこもって、春の季節の過ぎ行く様子を知らないでいるのも、

(秋末一郎著・『徒然草全釈』・加藤中道館刊)

- (8) 春たけなわに、簾を垂れて閉じこもって、変わりやすい春の景色がどうなっているのかを知らないのも、

(富倉徳次郎・貴志正造編『鑑賞日本古典文学』第18巻「方丈記・徒然草」・角川書店刊)

- (9) とじこもって春の移りゆきを知らずにいるのも、

(川瀬一馬著・講談社文庫・『徒然草』)

- (10) 家に引籠って気づかぬうちに春が過ぎてしまっていたなど、(佐藤春夫・田中澄江著・『日本古典文庫』第10巻「枕

草子 方丈記 徒然草」・河出書房新社刊)

- (11) 部屋に閉じこもって逝く春を知らずに過ごすのも、

(田辺爵著・『徒然草』・右文書院刊)

B

- (12) (花見などにも行かずに) 一室に閉じこもって、春がどのように過ぎ去ってゆくのか、そんなことを知らないでいるのも、  
(山岸徳平

・三谷栄一著・『徒然草詳解』・有精堂刊)

- (13) 家の中に引きこもって、花が散って春が暮れて行くのも  
知らないでいるのも、  
(佐伯梅友著・『対

訳日本古典全書』・「徒然草」・創英社刊)

今、この一三例をA、B二つのグループに分かった所以<sup>ユエ</sup>のものは、この文脈の背景をなす、「古今集」春歌下の、「藤原よるか(因香)の朝臣」の詠「たれこめて春のゆくゑもしらぬまにまちし桜もうつろひにけり」(二八〇)のその焦点たる、「まちし桜」に目を向けたか否かの一点であったが、実を言えば、この場合のA、B両グループの区分に、私は、さして固執するものではない。「花見などにも行かずに」(12)・「花が散って春が暮れて行く」(13)の解釈を、一旦は「まちし桜」の印象の投影と見たのであったが、それとて、後続する「そんなことを知らないでいるのも」(12)、「……のも知らないでいるのも」(13)の解釈の在り<sup>・・・</sup>ように想いを到せば、所詮は表面的解釈にとどまるものであり、Aグループ同様、因香が一首の生命を託さんとし兼好がその点に深く心を寄せた、「まちし桜」の真の意味に行き触れること無く終わっているもの、と考えられるに至ったからである。

通常の場合、一首の解釈は、それに詞書が添えられているな

らば、その制約下になさるべきであること、言うを俟たぬところである。が、稀には、作者が一首の成立の事情を詞書において示すことによって、その詞書の伝える現実の場を超えた、文芸約営<sup>マサ</sup>としての一首の特質をより際立たせんと企図する場合も存することを、我々は考慮に入れておかねばならぬ。そして、この因香の詠は、正に<sup>マサ</sup>そうした場合に属するものであった。詞書は次の如く語っている。

心ち<sup>ココロ</sup>そこなひてわづらひける時に、風にあたらしとて、おろしこめてのみ待りけるあひだに、をれるさくらのちりがたになれりけるを見てよめる。

すなわち、「心ならずも病いを得て、外気に触れることを避けて、簾<sup>スダレ</sup>や几帳<sup>キチャウ</sup>の帷<sup>カタビラ</sup>を垂れた室内に籠っていた間に、(せめては心を紛らわせようと)手折って、(枕許に置き、飽かず眺めた)桜の花も散りかけた、それを見て」という内容であるが、「まちし桜」を焦点とする一首は、この詞書の制約下に置かるべきものではない。試みにこれを解釈すれば、次のようにもなるろうか。——思いがけず病いを得て、風を避けるために簾や几帳の帷を垂れて室内に引籠り、外界の春の移り過ぎて行くさまを見ることのない状態の中にあっても、心中にその満開の美しい姿を思い描き、ひたすらそれをこの目で見ることを心待ちにしていた桜であったのに、病いようやく癒<sup>イ</sup>えて、何はさて措<sup>サ</sup>き

まずは花に目を向ければ、ああ、花は既に散り過ぎていたことよ――。

兼好が因香詠を以て自らの文脈の背景たらしめたその理由も、一首のかかる内容に己が心の本質に通うものを認めたことに外なるまい。当面の問題たる「たれこめて春の行衛知らぬも」を含む文脈の在りようは、兼好が「まちし桜」に重い意味を感じていたことを明瞭に物語っている。

I  
雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛知らぬも、なほ哀に情ふかし。

この一文を熟視しよう。やがて、我々の眼にも、この文脈の揺ぎない姿は際やかに浮き立ってくるのである。それは、極めて自然な心の働きによつて得られた姿である故、その過程をここに示すことは、正に蛇足以外の何物でも無いが、前にも述べた如く、従前の解釈でこの文脈の本質に触れえたものが皆無であるだけに、これは、避けて通ることの出来ぬ筋道とせねばなるまい。

我々が、まず、確と押さえておかねばならぬのは、傍線Ⅰを付した、「雨にむかひて月をこひ」の内容である。この部分、「類聚句抄」及び「和漢朗詠集」上の秋部に収められる、源順の「対雨恋月」序をさながら移したものであったが、その意味するところを理解することは容易である。それは、「雨に降

り閉ざされて目には見えぬ月の姿を心の中に思い描いて恋い慕う」というもので、そこには、〈具象〉を超えた〈心象〉の世界、すなわち、美しい物の姿を〈肉眼〉の働きを超えた〈心の眼〉の働きにより確と捉えるという、あの〈文学〉なる営みの秘密が語られているのであった。

次に、我々が見落としてはならぬこと、それは、傍線部Ⅰの末尾が連用形中止法の形を採り、一方、傍線部Ⅱに続いて並列の意に用いられる助詞「も」が存する、という事実である。そのことを通して、我々は、この一文が、本来二文として存在したものを、「なほ哀に情ふかし」という共通項によつて集約して一文となしたものの、との理解に導かれることになる。

実は、その点迄は従前の諸家の解釈においても均しく顧慮されておるところである。ということになると、ここ迄正しい解釈のための筋道を辿りながら、最後の一步を踏み出すその瞬間に、一転して、諸家が唯一人の例外も無く道を踏み違えることになるというその事実を、我々はいかに理解すればよいのか。兼好のこの一文が人を惑わせる妖しい力を備えていたとでも言うべきであるのか……。

- ともかく、諸家は一致して、その本来の二文を、
- (1) 雨にむかひて月を恋ふるは、なほ哀に情ふかし。
  - (2) たれこめて春の行衛知らぬは、なほ哀に情ふかし。

であつた、と確定してしまうのである。一見したところ、それは、正に<sup>マサ</sup>妥当な結論であるやに思われる。が、しかし、この結論は重大な過誤を冒しているのであつた。その過誤とは、以下の二点に関わる。

その一は、次の如き内容である。すなわち、今、ここに、本来の二文として諸家の想定した前掲(1)、(2)両文を本として、これを一文に集約するという作業を再現してみる。すると、徒然草の本文に到達する直前に、

I  
雨にむかひて月を恋ふるも、たれこめて春の行衛知らぬも、  
II  
なほ哀に情ふかし。

なる一段階の存したことが推定される。徒然草本文の一文とは、これが煩瑣の感を与えることを惧れた兼好が、傍線部Ⅰに続く助詞「も」を削除し、それに伴い傍線部Ⅰの末尾を連用形中止法の形に改変したものと考えられるのである。さて、徒然草の本文に先立つこの一文を対照しつつ論を進めよう。前に、私は、「なほ哀に情ふかし」が、本来の二文を一文に集約するための共通項である、と称した。それは紛れも無い事実である。が、私がそれ以上に重要な事実としてここに注意を喚起しておかねばならぬのは、もし並列の助詞「も」で受けられるⅠ、Ⅱ両部が同質のものでないとするれば、この両者が「なほ哀に情ふかし」で一括されることは決してありえない、という一事である。

そのことを前提として、前に列挙した諸家の解釈を見る。そこで、諸家が例外無く、Ⅰに相当する「雨にむかひて月を恋ふ」の部分については、「雨に降り閉ざれて目には見えぬ月の姿を心の中に思い描いて恋慕う」と〈具象〉を超えた〈心象〉の世界において対象の美しい姿に触れるという、兼好の心的状況を正しく把握しながら、一方、Ⅱに相当する「たれこめて春の行衛知らぬ」に対しては、「簾や帳を垂れて家の中に引き籠つていて外界で春が過ぎ去って行くの知らないでいる」と、単に〈具象〉の世界において対象に触れることをえぬという程度の解釈にとどまり、しかもこのⅠ、Ⅱ両部の内容を「なほ哀に情ふかし」なる共通項で一括しようとした、その態度は、これを容認する訣<sup>ワケ</sup>にはいかぬのである。

そして、第二の問題は、次の事実に関わるものである。すなわち、この傍線部Ⅱが古今集の春歌下に収められる藤原因香の詠「たれこめて春のゆくゑも知らぬまにまちし桜もうつるひにけり」を言わば〈本歌取り〉の手法における〈本歌〉の如き背景として捉えながら成り立っていることを、私は前述した。そして、〈本歌取り〉の手法においては、新たな一首の中に含まれた〈本歌〉の一部の詞章は、単にそれ自体の意味を一首に添えるにとどまらず、その詞章を便りとして手繰り寄せられた〈本歌〉全体の雰囲気<sup>フキ</sup>を以てその新たな一首の雰囲気<sup>フキ</sup>たらし

むる、という作用を果たすものであった。ということであれば、この傍線部Ⅱの解釈も当然因香詠一首の全体の内容を反映するものでなければならなかったはずである。しかるに、従前の諸家の解釈にはそうした配慮がなされてはおらぬのである。この点よりしても、従前の解釈は容認し難いものであった、と言える。

さて、徒らに結論を導くことを遅延させるのは止めよう。

これ迄の考察を通じて、既に結論は見えている。傍線部Ⅱとは、実は、省略された形であつたのだ。で、その省略された内容を補い、徒然草の一文の本来の姿をここに復元すれば、以下の如きものとなる。

雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春の行衛知らぬ（ながらも思へる）も、なほ哀に情ふかし。

ここに至り初めて、この一文は、〈心象〉の世界の深い趣を尊ぶというその態度において、首尾一貫したものとなることをうるのである。

同じき段の、それも僅かな隔たりを置くに過ぎぬ後文第八段落（8）において、兼好がこの思いを重ねて語るその部分、

すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立（ち）去らでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。

を、諸家が打ち揃って看過したというのも、不可解なことであつた。

\* \* \*

〈具象〉として肉眼の機能によつて捉えられるところは、対象の一瞬の表面的な現れにとどまり、対象の内部に一貫して保たれている本質的な姿は、想像力を掻き立てて思い描く〈心象〉によつてのみ捉えられるものである、という事実、すなわち、〈文学の眼〉の秘密、それについて最も精彩に描かれているのは、徒然草・第一九一段である。

「夜に入（り）て物の映えなし」といふ人、いと口をし。万のものの綺羅・飾り、色ふしも、夜のみこそめでたけれ。昼は、ことそぎ、おやすけたる姿にてもありなん。夜は、きら、かに、花やかなる装束、いとよし。人の気色も、夜の火影ぞ、よきはよく、物言ひたる声も、暗くて聞（き）たる、用意ある、心にくし。匂ひも、ものの音も、たゞ夜ぞ、ひとときはめでたき。

さして異なる事なき夜、うち更（け）てまゐれる人の、清げなるさましたる、いとよし。若きどち、心とめて見る人は、時をも分かぬものなれば、ことに打ち解けぬべき折節ぞ、褻・晴なくひきつくろはまほしき。よき男の日暮（れ）てゆするし、女も、夜更くる程にすべりつゝ、鏡取

りて、顔などつくるひて出(づ)るこそをかしけれ。

ここに語られているのは、優れた文明批評家でもあった谷崎潤一郎が名著『陰翳礼讃』<sup>インエイライザン</sup>において語った、それにも似た、芸術と哲学の母胎となる、〈陰翳〉の世界である。

読者諸氏に誤解されぬよう、以下言わずもがなの二点を記すことにしよう。

その一は、この徒然草・第一九一段にあつて、兼好は、光無き夜の闇の底に獲物を求めんとする野獣の如く、暗闇に対しているのではない、ということである。谷崎は、『陰翳礼讃』の中で、案内されて座した、光溢れる表通りから遠い、京都のお茶屋の奥座敷で、余りの暗さに思わず目をしばたいた谷崎は、やがて、仄かな明るさを感じ取るのである。それは、どこからか洩れてくる僅かな光を受けて、襖に張られた金箔が放つ金そのものの鈍いしかしながら確かな光であつた、と述べている。

〈見えぬこと・見えぬもの〉に対して恐怖と嫌悪とを覚え、それを超えんと志す西洋は、夜の闇を侵蝕して、人間の日常生活Ⅱ〈藝〉の場を拡大すべく、夜を昼に準じた時間帯に組み入れるがために、煌々たる光を放つ照明器具を発達・進化させてゆくのだが、対して東洋とりわけ日本は、恐らくは、後述するが如き夜という時間帯を特殊なものと観ずることも与つて、夜の闇を駆逐せんがための照明器具の進化・発展の段階も低い

ものにとどまつたのであつた。曾て観たNHKテレビの「クイズ面白ゼミナール」に従えば、四〇〇Wの蛍光灯一本の照度は、江戸時代日本人の用いた照明器具である、行燈の燈心一本を点した場合の照度の一〇〇〇倍に相当する、ということである。

四畳半の部屋の中に行燈の火を点しても、部屋の隅々には闇が忍び寄る、そうした状況であつたのだ。しかも、日本の照明器具は、常に一定の照度を保つべく改良された西洋のそれとは異なり、火の属性をさながら保つものであり、時に明るく輝き、時に暗く翳るのである。

兼好が「めでたし」と賞美する、「万のものの綺羅(光彩)・飾り、色ふし(色調)」とは、さような「夜の火影」が刻々に変化せしめる、幻想的な美の世界であつたのだ。そうした「夜の火影」の下では、「匂ひ」、「ものの音」も、格別な趣を帯びるのである。〈視覚〉と〈聴覚〉また〈嗅覚〉との関わりについて、後に語るところとなろう。

その二は、〈夜〉という時間帯の有する特別な意味である。

徒然草・序段中の「日暮らし、硯にむかひて、」は、往々にして、「終日(一日中)硯を前にして、」と口訳されるのであるが、厳密に言えば、〈日暮らし〉は、〈日すがら〉また〈ひねもす〉同様、「日の出(夜明け)から日没に至る、日のある間中」の義で、「日没から日の出(夜明け)に至る、終夜(一晚中)」



の義の、〈夜もすがら〉の対義語であつた。〈昼〉と〈夜〉とが  
かくも截然と言ひ分けられていたのは、古来、我が国にあつて  
は、昼Ⅱ人間が日常の生活を営む〈藝〉の時間帯Ⅱ夜Ⅱ神や精  
霊などが出現し活動する、人間にとっては非日常的な〈晴〉の  
時間帯、と考えられていたことの如実な現れであつた。

祭祀を営み神樂を奉納するなど、神への奉仕がなされ、神の  
資格で男が女の許に通うのも夜間に限定される、という慣わし  
は、古代を通じて保たれたのであつた。

中世に至り、ようやくかような〈古代的神秘性〉は稀薄にな  
り、夜間における対人交流の機会も増大することになるが、さ  
りとして、それは、単に昼の日常生活が夜間に迄延長されるに  
至つた、という底のものではなかつた。ある種の緊張と期待と  
心用意の下に設定される、言わば、〈晴の場の交流〉としての  
性格をもつものであつた。たとい、それが熟知した人との触れ  
合いであつても、〈夜の火影〉の下にあつては、〈未知なる存在  
との新鮮な晴の触れ合い〉に変貌を遂げるのである。かかる場  
は、〈想像力〉を掻き立て、〈文学の眼〉を育くむ場であつた。  
当面する徒然草・第一三七段の中にあつて、〈文学の眼〉に  
触れてくるのは、以下の諸段落である。それを引きながら、そ  
こに些かのコメントを添えてゆくことにする。

まず、〈色好む〉ことにつき語る、第六段落(6)を紹介す

ることから始めよう。

万の事も、始終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへ  
に逢(ひ)見るをばいふものかは。逢はで止みにし憂さを  
思ひ、あだなる契をかこち、長(き)夜をひとり明し、遠  
き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとは  
いはめ。

実は、兼好が徒然草の中で〈色好む〉ことを語るのは、この  
一段のみではない。いま一つの例(徒然草・第三段)をここに  
記しておく。

万にいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうく  
しく、玉の扨の當なきこ、ちぞすべき。

露霜にしほたれて、所さだめずまどひありき、親のいさ  
め、世の旁りをつゝ、むに心のいとまなく、あふさきるさに  
思ひみだれ、さるは独寝がちに、まどろむ夜なきこそを  
かしけれ。

さりとして、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたや  
すからず思はれんこそあらまほしきわざなれ。

この両者を対比するとき、我々は、この両者が、〈色好む〉  
ことⅡ〈色好み〉という同一の主題に従うものでありながら、  
なお、それを論ずる姿勢にあつては、甚だしくかけ離れたもの  
であることを知るところとなる。そのことを的確に伝えんがた

めに、論を些か迂回させることになる。諒恕されたい。

さて、〈色好む〉ことⅡ〈色好み〉とは、その語構成に立ち戻つて言えば、〈色〉(一般的には、「男性にとつての愛の対象たる女性」とされるが、実は、伊勢物語の第二八・三七・一三一段には「色好みなりける女」とあることよりすれば、「男女を問わず、その愛の対象たる異性」とすべきであろう)と〈好む〉ことⅡ〈好み〉(「選択の結果得られた美・好尚」の義)との合した語であるところから、それは、その本質において、揺ぎなき理念の裏打ちを得た美的行為であるのだが、当事者にとつて、その成就を目指す過程は、幾多の逡巡・猜疑・悲嘆に噴まれる〈茨の道〉でもあったのだ。その事情は、関連語〈恋ふる〉ことⅡ〈恋〉につき考察することによつても、明らかになることであろう。未だ仮名という表記法が獲得されることなく、従つて、全て〈万葉仮名〉という漢字のみの表記に依らざるをえなかった万葉集にあつて、〈恋〉を「孤悲」という二字の漢字で表さんとした、その表記者の心働きに、私は、舌を巻くのである——。〈恋〉は、その本質において、男と女の二人が、周辺の他者とは隔絶した所に二人のみの世界を作り閉じ籠ろうとする、排他的で閉鎖的な反社会的行為である。それ故、男・女それぞれの親を始めとする周囲の人々から諍りを受け恋の成就を阻まれることになるのも、成り行きの必然とせねばなら

るまい。かくて、常に愛する人と共にいたいと願う男と女が、現実には隔てられ、孤り過ごさねばならぬ己が身の在りようを悲しみ嘆く——〈恋ふる〉・〈色好む〉とは、さような世界であるのだ。

しかるに、徒然草・第三段に語られる〈色好む〉ことには、〈色を好む〉という現実の経験を有する者の心に必ずや印されているはずの軌跡が全く見られぬのである。そこに語られているのは、己が人生とは些かの接点をも有することの無い、言わば、〈色好む〉という営みについての一般的解説といった趣の開陳であるに過ぎず、あまつさえ、その末尾に記される、「さりとて、ひたすらたはれたる方にはあらで(一途に恋に溺れいるというのではなく)、女にたやすからず思はれんこそ(女に安っぽく見くびられることのないのが)、あらまほしかるべきわざなれ。」の一文からは、〈恋〉の対象Ⅱ〈色〉たるべき女性(を含む女性)をして、心許せぬ、口さがなき存在、と認識する、兼好の姿勢が窺われるのであつて、それが、〈色好む〉ことからいかに遠くかけ離れた心の在りようであるか、思うべきである。

それに対して、徒然草・第一三七段の第六段落(6)に語られるところは、〈色好む〉ことⅡ〈恋する〉ことの本質は、その〈恋〉の成就を目指して情熱をたぎらせる、行動の軌跡の中

に存するといふよりは、むしろ、その〈恋〉の行く手を遮り、その成就を阻まんとする幾多の困難や障害を前にして、重ねる逡巡、猜疑、怨嗟、悲嘆などの中で育まれるものである、というのである。

それを語る兼好の口調は平静なものであり、文体も努めて感情を抑制したものになっている。つけても、私は思う。徒然草・第三段における、己が経験も未だ乏しいままに、何人かに語り伝えるために、〈女に伍して生きる望ましい男の在り方〉の一環として、表層的に〈色好む〉ことを語るにとどまった段階と、〈色好む〉ことⅡ〈恋する〉ことの本質は、得難い愛の対象を覚めてひたすら思い、迷い、悲嘆に沈み、また、喪失した愛の日をしみじみと思い返す、その外のことではないと認識するに至った、徒然草・第一三七段・第六段落との間には大きな隔たりが存するものと言わねばならず、その隔たりを埋めたものは、恐らく、兼好自身の切実な〈恋〉、そして、その〈喪失〉の経験であつたに相違無い、と――。

次に引く珠玉の一段（徒然草・第二六段）は、何時、誰人を相手としたものか、現時点では詳かにしえぬものの、兼好の人生に多大な影響を及ぼし、また、兼好に〈色好む〉ことⅡ〈恋する〉ことの本質を知らしめる契機ともなった、〈恋〉そしてその〈喪失〉の経験を語るものである、と考えられる。

風も吹（き）あへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞（き）しことの葉ごとに忘れぬものから、我（が）世の外になりゆくならひこそ、なき人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。

されば、白き糸の染まん事を悲しび、路のちまたのわかれん事をなげく人もありけんかし。堀川院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が塙根は荒（れ）にけりつばなまじりの堇のみして

さびしきけしき、さる事待りけん。

試みに、これを口訳しておこう。

風が吹くか吹かぬかという間に散り過ぎてしまう桜の花、その花にも似て移ろいやすい、人の心の花とも譬うべき、恋の思いに耽つていた年月を思うとき、その当時、折につけてしみじみと聞いた、あの人のどの一言も、今になつても、決して忘れたりしてはいないものの、こうして二人の〈恋〉が、終わりを告げるに至ると、それらの言葉がいずれも私とは無縁の世界のものとなり、しらじらとした味気無いものに変わつてゆくのは、世の常の慣いとは言え、愛する人との〈死別〉の折に比しても、遙かに深い悲しみを齎すのである。

心を通わせ、深い縁で結ばれていた二人も、一度別れを告げ

るや、互いに縁無き他者に変じてしまふ悲しみを思うが故に、本来同じ白糸であつたものも、それぞれ相異なる色の糸に染め分けられれば、それらはもはや、同じ白糸に戻ることが出来ぬことを悲しび、また、岐路に立つて、今まで同じ一つの路を辿つて来た二人が、ここで一方が北、一方が南へと、それぞれ次の一步を踏み出せば、もはや二人は同じ路を辿ることが出来ぬ、それを思つて泣いたという、中国の故事も存するのである。「堀川院御時百首和歌」の中に藤原公実公の詠として、収められる一首、――

昔契り<sup>ナギ</sup>を結び、今は別れてしまつた、あの人の住んでいた家を久方ぶりに訪ねてみたが、すっかり荒れ果ててしまつたことよ。垣根の辺りは、一面に茅花<sup>ツバナ</sup>が生い茂るその中に交じつて僅かに堇<sup>スミレ</sup>の花が咲いているばかりで……。

淋しい趣よ。この詠の作者にも、そうした過去がきつとございましてしょう。

となるであらうか。――

この一段、実は、文脈のなだらかな流れ、という観点に立てば、「されば、……なげく人もありけんかし。」の一文は無くもがな、と思われるのである。しかるに、現実には、この一文は、確かに、この徒然草・第二六段に含まれているのである。そのことは、恐らく、《恋の終わり》を、《無常》の悲劇に抗する最

後の手立てとしての、《内的時間の崩壊》の悲しみという観点への契機とするものであるう、と思われるが、後に譲り、今は触れぬこととする。

次は、本段の第九段落(9)において、《文学の眼》を以て対象に接する《詩人》にも通うものとして、「よき人」(都の教養ある人)と、他方、《肉眼》の機能にのみ信を置き、対象の一瞬の表面的な現れに接することに終始する《世俗の人》に通う存在として、「片田舎の人」(片田舎に住む無教養な人)という対立的構図を描き、それぞれの特質を、「ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。」(ひどく面白がつて大騒ぎをする様子も無く、もてはやす態度もあつさりしている)と、「色こく万をもて興ず。」(しつこく、何事につけても大げさにもてはやす)という形で語つた兼好が、「祭見しさま」(葵祭りに対する接し方)という観点から、《文学の眼》の秘密を印象深く語る、本段の第十段落(10)である。我々は、これに接し、更めて、兼好の観察眼の鈍さに舌を巻く――。ごく僅かな解説を加えれば、その内容は実に明快である。ともあれ、その本文を引くことにしよう。

さやうの人(片田舎の人――註筆者)の祭見しさま、いと珍らかなりき。「見事(見るべきもの。ここは、斎王代

の行列を指す——註筆者）いとおそし。そのほどは棧敷（サジキ）  
用なり」とて、奥なる屋にて、酒飲み、物食ひ、囲碁（キゴ）・双  
六（ロウ）など遊びて、棧敷には人（見張りの人——註筆者）を置  
きたれば、「渡り候ふ（サワラ）」といふ時に、おのおの肝つぶる、  
やうに争ひ走り上りて、落（ち）ぬべきまで簾張り出（スゲレ）  
て、押し合ひつゝ、一事も見洩らさじとまぼりて（見守つ  
て——註筆者）、「とあり、かゝり（あだ、こうだ——註  
筆者）」と物ごとに言ひて、渡り過（ぎ）ぬれば、「また渡  
らんまで」と言ひておりぬ、たゞ物をのみ見んとするなる  
べし。都の人のゆゑしげなるは（いかにも身分の高そうな  
方は——註筆者）、睡（ネ）（り）て、いとも見ず。若く末々な  
るは（身分の低い者は——註筆者）、宮仕へ（ミヤツカ）に立ち居（キ）  
の後にさふらふは、様（サマ）あしくも及びかゝらず、わりなく見  
んとする人もなし（見苦しくのしかかったりすることも無  
く、むやみに葵祭りの行列を見る人も無い——註筆者）。

ここに、「都の人のゆゑしげなるは、睡（り）て、いとも見  
ず。」と語っている部分は、一見、いかにも奇（オ）を銜（テラ）つたもので  
あるかの感を抱かせ、さしずめ、室長の『玉勝間』ならば、「兼  
好法師の拗（ネ）心」とでも言いかねぬところであるが、その評価  
は当たるまい。些かの誇張がそこに存することは否めぬものの、  
それが、「片田舎の人」に代表される〈世俗の人〉の、〈肉眼〉

の機能にのみ信を置き、〈葵祭り〉の全体における一時の表面  
的な現れに過ぎぬ、〈行列〉を「一事も見洩さじとまぼ」る——  
「たゞ物をのみ見んとする」態度の対極にある、〈詩人〉の  
在り方にも通う、「都の人のゆゑしげなる」の、〈想像力〉の導  
く〈文学の眼〉を以て、〈行列〉のみにとどまらざる、〈葵祭り〉  
の全体像を描かんとする態度、であることは明白である。

\* \* \*

さて、兼好徒然草の本質に関わる重大な問題として提起した、  
〈無常の眼〉、〈文学の眼〉について縷々重ねてきた、徒然草・  
第一三七段を対象とする本考の長広舌にも、決着をつけるべき  
時が来たようだ。それを、私は、本段の第七段落（⑦）を考察  
することを通して果たしたい。その第七段落は、

望月（モチヅキ）のくまなきを千里（チサト）の外（ホカ）まで眺めたるよりも、暁（アカサキ）ちか  
くなりて待（まち）（ち）出でたるが、いと心ぶかう、青みたるや  
うにて、ふかき山の杉の梢に見えたる木の間の影（コノマ）の、うちし  
ぐれたる村雲（ムラクモ）がくれのほど、またなく哀（アハレ）なり。椎柴（シビシバ）・白檜（シラカシ）  
などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身に  
しみて、心あらん友（トモ）がなと、都恋（ミヤコ）しう覚ゆれ。

というものである。

これに即して語らんとして、またもや、私は、甚だしい困惑  
を覚えずにはいられないのである。この段落第一文中の傍線部、

「望月のくまなきを千里の外まで眺めたる」に対する従前諸家の解釈にしてさながら容認しうる例を唯の一つも見出しえぬのである。これは一体どうしたことであろう。前に、本段の第二段落の一文を対象として、従前諸家の解釈を検討・批判した、それと同じき手法で、この第七段落第一文中の傍線部に対する検討・批判をなしてゆくこととする。

A

- (1) 皎々と澄み渡つてゐる満月が、千里の外まで照してゐるのを眺めるよりも、(今泉忠義著・角川文庫・『徒然草』)
- (2) 満月が一点のかげりもなく皎々と照らす光を、まるで千里の遠方まで眺め渡した時のよりも、(山岸徳平・三谷栄一著・『徒然草詳解』・有精堂刊)
- (3) かげりもなく輝く満月を遥かに遠い天外にまで眺めているのよりも、(安良岡耕作者・『徒然草金注釈』・角川書店刊)
- (4) 満月の曇りなく澄んでいるのを、はるか遠くまでながめているよりも、(秋末一郎著・『徒然草全釈』・加藤中道館刊)
- (5) 満月の曇りなく照るのが遠い千里の外まで見通せるような眺めよりも、(富)

倉徳次郎・貴志正造編・『鑑賞日本古典文学』第18巻「方丈記 徒然草」・角川書店刊

(6) 十五夜の月が曇りなく照っているのを、千里の遠くまでもながめだしたのよりも、(川瀬一馬著・講談社文庫・『徒然草』)

(7) 満月の晴れ渡つたのを千里の果てまで飽かず賞したのは、(佐藤春夫)

・田中澄江著・『日本古典文庫』第10巻「枕草子 方丈記 徒然草」・河出書房新社刊

- (8) 満月の、かげりのないのを、千里のほかまではるばるながめているのよりも、(佐伯梅友著・『対訳日本古典新書』「徒然草」・創元社刊)
- (9) 満月の曇りなく照り渡っているのを、千里も遠い広い所までも眺め渡したのよりも、(田辺爵著・『徒然草』・古文書院刊)

B

- (10) 望月のすこしの陰もなく照らしている時に、千里もある遠いところまで眺めてのよりも、(金子武雄著・『明解徒然草』・新塔社刊)
- (11) 満月が曇りもなく照らしていて明かるい光景を、ずっと

遠方まで眺めわたしたのよりも、

(保坂弘司著・学燈文庫・『徒然草』)

- (12) 満月の光の行きとどかない所のない光景を(はるかに遠く)千里の彼方までじっと見通しているのよりも、

(松尾聰著・『徒然草全釈』・清水書院刊)

C

- (13) 満月が照らさぬ隈々もなく照らしているけしきを、はるか遠くまで見とおして物思いにふけているのよりも、

(浅尾芳之助・森通・野

村継男著・『文法評釈徒然草』・日栄社刊)

この場合のA、B、C三グループの区別は、A、Bについては、前者が「月の光」あるいは「月の姿」を「眺める」とし、後者が「月の光に照らされた光景」を「眺める」とする、その立場の相違によるものであり、そうした視点よりすれば、CはBグループに含めてもよいものの、「物思いにふけている」という、他と相異なる要素を含みもつものである故、とりあえず、Cグループとして独立させたものである。しかしながら、この場合も、僅かにCが正しい解釈への手懸りを一旦は得ながら、最終的には正しい解釈に行き着くこと無く終わったことを

知りうるのみで、他のA、B両グループにあつては、正しい解釈への手懸りさえも擲<sup>ツカ</sup>んではおらぬのであつて、その意味において、これをA、B両グループに区分したことも無意味であつた、と言うべきか。

従前諸家の解釈の誤りの因は二点存する。その一は、兼好がそこに二重の意味を籠めて用いた、「眺む」の語に對して、字面に拘泥したのか、その第一義としての、「心中に空しいものを感じつつ物思いに沈む」の意味を顧みること無く、第二義としての、「遠方に視線を向ける」の意のみで解そうとした、その態度であるのだが、より根源的な問題として、我々が注意を払わねばならぬ第二の点は、前述の、「たれこめて春の行衛<sup>ユタマ</sup>知らぬ」の解釈の場合同様に、全ての解釈が、この文脈の背景をなす、「白氏文集」卷十四所収の、「八月十五夜禁中独直、對<sup>タテマツル</sup>月・憶<sup>オモフ</sup>三元九」なる詩の一節、「三五夜中新月色、二千里外故人心」の本質を正しく捉えようとしなかった、その態度であつたとせねばなるまい。白居易の詩句中何故に「故人心」のみが切り捨てられねばならぬのか。実は、その詩題に照らして、そこにこそ、この詩の生命は宿されていたはずなのである。

今、この部分を解釈してみよう。——一点の曇りも無く、皎々と冴え渡る中秋の名月の、その新鮮な光に目を向けつつ、二千里の彼方にあつて、今まさに同じきこの瞬間、この月に見

入りながら、私を想うているに相違無い、その昔なじみの友の上に、遙かに想いを馳せ物思いに沈む、——こうもなろうか。

すなわち、ここには、川端康成が、矢代幸雄博士の言葉を引きつつ、「美しい日本の私」なる題の下、ノーベル文学賞受賞記念講演として語った、あの「雪月花の時、最も友(君)を憶う」という、日本人の伝統的な美意識が語られているのもあった。

中秋の名月という美しきものに接する時、我々は切に願う、自らの傍らに心の通い合う人がいて、敢えてそれを言葉で確認し合う必要も無く、美しきものを共有しているという喜びを噛みしめつつ、その名月に見入りたい、と——。そして、その願いが容れられず、心の通い合う人と隔てられている時、我々は思う、同じきこの瞬間、自らが名月に目を向けつつ、その人の上に想いを馳せている。そのように、その人もまた、月に見入りながら、自分の上に想いを馳せているに相違無い。時間を、有しているという確信が、二人の間に存在する空間的な隔たりを埋めるのだ、と——。

白居易に導かれ、やがて、我が国の多くの〈恋する〉人々の間で育くまれていった、かような美意識——、それが、傍線部「望月のくまなきを千里の外まで眺めたる」の真の意味であることが明らかになった今、我々は、兼好が、名月を媒体とした

そのような美的世界にも勝るものとして、何故に、「暁ちかくなりて待(ち)出でたる」月——それは、「ふかき山の杉の梢の木の間」に見え隠れする月であり、また、先程一しきり時雨を降らせて過ぎた厚い雲間に見え隠れする月でもあるが——それを、より尊重するのか、考えねばならぬのである。

その点についての答えは自ずと明らかである。既に、私は、「望月のくまなきを千里の外まで眺めたる」という中秋の名月に対する接し方が、「伝統的な美意識」という〈型〉となつて、我が国びとの心を自然のうちに拘束している、という事実を語っているのである。初めて接する眼前の景に対し、既にそれに対しての接し方が用意されていて、私に対して、その接し方から逸脱するな、と強制してくる。そのような理不尽があつてよいものか。最初に中秋の名月に対する美しき世界を拓いた、白居易を賞賛することとは別に、兼好がさような思いを抱くのは、当然のことと言えよう。

対して、傍線部に続く「よりも」以下に語られる世界、それは、「ふかき山の杉の梢に見えたる木の影」、「心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ」の部分からも、恐らく世俗を逃れ、独り山中に庵を結んでいた時期の経験に基づくものと思われるが、いずれにもせよ、それがいかなる〈型〉にも拘束されることの無い、文字通り新たに兼好の眼と心とが触れ合った美の世



界であることは、明らかである。

前に、私は、〈文学の眼〉の基盤には〈想像力〉が存在する、  
と言った。そして、その〈想像力〉を育くむものが、いかなる  
〈型〉からも拘束されざる眼と心による徹底した観察という営

みであることを、ここに更めて言い添えておくことにする。

(続く)

(人文学部日本文学科教授)